

学校現場における「イヌの飼育と活用」

—「イヌ」を通して見えてくるもの・学ぶもの—

岩手県 佐々木 俊幸

生物教材として注目される小動物

私が勤務する農業高校の世界では、子供数の減少や、産業構造の変化の中で、存続問題を含めた学校再編計画・教育カリキュラムの見直しがすすめられている。

中でも酪農をはじめとする畜産部門については、実際問題として畜産農家の後継者が入学してくるといったケースが少なくなっていること、加えて、教育施設としての畜産動物の確保が予算的にも学校運営上も難しい現状になってきていることから、縮小または廃止しようとする学校が増えてきている。

そして、それに代わるもの、動物とのふれあいを通して学ぶ教材として取り入れられてきているものが「小動物」である。

従来の教科「畜産」では、生産や農業経営技術の一環としてとらえられていた動物教育を、社会動物やセラピーへの活用を考えて、生活の質の向上や健康の改善を図る学習とし、「生物活用」という教科として学習していこうとする考え方である。

文科省の規定では、この「生物活用」を週あたり2時間～8時間で教えることとなっており、学校の実態によって2時間程度の座学で行っているところもあれば、関連した学校独自の教科として、別途「動物セラピー」「動物看護」「アニマルフード」などを設定し、実習なども含めたより掘り下げた授業を行っているところもあるようである。

イヌを通して学ぼうとするもの

小動物の中でも、とりわけ身近で扱いやすい動物として取り上げられているのが、イヌである。

大項目「動物の活用」のなかでも大きくクローズアップされ、教科全体の中でも大幅なページをさいて取り上げられている。イヌの章のなかでどのようなことが教えられているのか、学習項目をご覧いただきたい。(次頁図参照)

学習を通して、イヌを愛玩動物や伴侶動物としてとらえるだけに限らず、新しい活用法として動物介在療法や動物介在活動に参加させるなど、広く社会動物としてとらえていこうとする中身になっている。

しかしながら、教科書の限られた紙数の中で、概論的な記述に徹しているのだというのであればその通りなのかもしれないが、教科書の中で柴犬は分類上、プードルやマルチーズらと同じ扱いで「愛玩犬」とされており、「愛玩犬」と「作業犬・実用



教科書「生物活用」の目次

- 第1部 園芸の活用
 - 第1章 園芸の活用と効果
 - 第2章 草花の栽培と活用
 - 第3章 野菜・ハーブの栽培と活用
 - 第4章 園芸療法
 - 終章 交流活動プログラムの作り方
- 第2部 動物の活用
 - 第1章 イヌの飼育と活用
 - 第2章 ウマの飼育と活用
 - 付章 ネコ
各種小動物
(ウサギ・ハムスター・飼鳥・は虫類)

出版：農文教より全163頁





犬」は別物なのですよといった扱い。また、縄文柴犬研究会の中で語られてきた柴犬の歴史や遺伝資源の「価値」などまでは触れられていない。「イヌの飼育と管理」といったところでは、「屋内飼育はイヌの習性や動物福祉という観点からより望ましい飼い方である。やむを得ず屋外で飼育する場合は…」などと記述されているところなど、個人的にはどうも今ひとつ引っかけりのある内容も見られている。

ペットブームに便乗した、あるいはあくまでも人間生活に有効利用するための動物の学習内容として考えるのではなく、「畜産動物とは何ぞや」といった従来の畜産学の基本路線に則る展開をしていかないと、イヌ学を学ぶ意義というのが薄っぺらなものになるし、イヌを通して学ぶべきものが狭いものになってしまうのではないかと思うのである。

この研究会が、これまで多角的な方面から積み重ねてきた研究財産を、今、イヌの世界に目を向けてきた学校教育の現場とうまくリンクさせ、教育の場に還元していくことはできないものかと考える。

研究会の皆さんが、学校現場に足を運ばれる機会がありましたら、日頃の研究活動の成果を積極的に発揮していただき、農業教育の発展に貢献して下さることを期待する次第である。(2007.01.15)

第1章 イヌの飼育と活用

1. イヌの活用と効果
 - イヌの誕生と活用のあゆみ
 - 我が国におけるイヌの活用
 - イヌの新しい活用と効果
2. イヌの起源と種類・品種
3. イヌの性質と行動
4. イヌの飼育と管理
 - イヌの飼育場所
 - 飼料と飼料給与
 - 日常の管理と病気対策
5. イヌの活用と訓練
 - 盲導犬・介助犬の活用と訓練
 - 動物介在療法への活用と留意点

出版：農文教より全15頁

学校現場における「イヌの飼育と活用」 (第2報)

—— 縄文柴犬的アプローチによる授業の展開 ——

岩手県 佐々木俊幸

前報(本誌95号)では農業教育において、畜産動物を学ぶ新しい教材として「イヌ」が注目されていること、また、いわゆる「イヌ」学の持つ新しい可能性について期待するところをまとめた。

柴犬研究会がこれまで積み重ねてきた研究成果が、実際の学校現場においてどれだけの影響力があるのか、そのことを通して「生徒達に見られる変化」とはどんなものなのか、そういったことを考察する機会を得たいと思い、五味事務局長を講師に迎え特別授業をしていただいた。

これは、今年度北海道・東北支部交流会を、私の勤務校(花巻農業高校)でやることになっており、その際に生徒らも参加させる予定でいたため、その事前学習としての意味合いもあった。

また、教科「生物活用」を日頃指導している教諭のほうからも、教科書的なアプローチとは違った視点でイヌについて生徒らに考えさせる良い機会になるだろうとのことから実施した次第である。

今回は、授業の様子をここにレポートするとともに、縄文柴犬の存在を知った生徒らの心の動きを探り、「イヌの持つ教育力」なるものを考えてみたい。

高校生の持つイヌのイメージ

はじめに、今どきの高校生が持つイヌのイメージを知りたいと思い、授業の前に簡単なアンケートを行った。

一言で「今どきの高校生」と言ってみても、対象となる高校生のインテリジェンスの違い、家庭環境や生活状況などの違いなどがあり、たった20数名程度のアンケートでは高校生の一般的なイメージとは言えないところもあるが、集計をしたところ以下のような結果であった。—— 右:表参照 ——

アンケート結果から見ると、イヌを身近な生活の場に置いた経験を持つものが約半数ほどいるが、イヌを飼っていても血統とか犬種などに無頓着な傾向が見られているようだ。

また、イヌとの生活経験があるなしにかかわらず、おおよその生徒はイヌ好きであること、身近なペットである認識があることが伺われる。

授業のねらいと講義内容

アンケートの結果を見ても判るとおり、生徒達はイヌを身近な共同生活者として認識しており、日頃からどのような関わり方をすればよいのか考えている様子が伺われているものの、イヌと人の関わりの歴史的な背景や、イヌの血筋とは何か、血統の意義といったことには無関心であるように思った。とりわけ血統については日本犬と洋犬の区別もつかない



授業風景

犬に関する事前アンケート集計結果 H19.5月末日実施 高校3年生22名(男8名女14名)

1. 自宅で犬を飼育していますか。
①いる:5 ②いない:12 ③以前はいた:5
2. 1で「①いる」と答えた方は、犬種がわかりますか？
ミックス:2 テリー:1 ラブラドル:1 柴犬:1
3. 犬は好きですか、嫌いですか。
①好き:18 ②嫌い:4(うち、1の「①いる」で嫌いが(柴犬を飼育)、1の「③以前は居た」で嫌いが)
4. 知っている日本犬の種類をあげてください。
秋田犬:16 柴犬:15 土佐犬:8 紀州犬:1 甲斐犬:1
我が家のシロ(テリー犬を飼っていると答えた生徒):1
5. 犬とのエピソード、疑問に思うことなど
・ニュースで、ある小学校に犬が入って生徒がかまれたという話を聞いて以来、犬は怖いと思っている。
・小学校の頃、犬にちょっかいを出したらかまれたことがある。
・救急車が通るとほえる犬がいるが、なぜだか疑問である。
・小さい頃、犬との散歩が楽しかった。
・小さい頃、犬に追いかけられた。
・犬に追いかけて困っている。(犬が嫌いと言った生徒)
・犬にも表情が、ちゃんとあるらしい。
・犬の気持ちを理解できるためには、どうしたらいいのか。

生徒もいたりするといった状況である(日本犬=国内で飼われている犬の誤解か?)。教科指導の内容も、これらの状況をふまえて、イヌの飼い方やしつけなど、これまで一般に知られてきている基本的な内容の再確認といったところが中心になっているようである。

これらのことをふまえて、以下のようなねらいで、講義をしていただくことにした。

○授業のねらい

現在、教科「生物活用」において、「動物の活用」の中で犬の飼育と活用に関わる学習がなされている。

この中において、柴犬は日本犬あるいは愛玩犬種として扱われており、詳細については触れられていないところである。

このことから、もっとも身近でありながら、あまり顧みられなかった日本犬の特性や犬と日本人の日常生活のあり方などを考えさせる意味において、研究的な立場から柴犬を教材として取り上げることが目的として、今回のような授業を企画した。

○講義内容

- ①ヒトとイヌの関係の始まり
- ②日本人とイヌの生活
- ③縄文柴犬の紹介
- ④ヒトとイヌのあるべき関係

授業の実施

6月5日、花巻農業高校生物科学科3年生22名の生徒に実際に授業を行った。この22名は選択授業で「生物活用」を選択している生徒らであり、中には将来動物関係の仕事に就きたいと考えている者もいる。また、「農業高校」とはいえ、ご時世がら、農家の子弟あるいは農業後継者となる者はごく少数である。農業教育は今や技術教育というよりは、自然科学の体験学習的な場なのだという認識のもとに講義にあたっていただいた。

授業およそ100分(50分-休憩10分-50分)という形で行い、前半は形態学を中心とした日本犬・縄文犬の歴史など、後半は現在の私と犬の生活など、身近な話題を中心としたものを取り上げて授業を行っていただいた。

授業を受けるにあたって、簡単なレポートと感想を書かせてみたが、授業の様子については、生徒直筆のレポートを取り上げてみたのでご覧いただき、その雰囲気を感じていただきたい。(以下、レポート)

○講義の内容

四国犬 1934年 → 戦う犬
秋田犬 1948年 → 今の秋田犬の犬と違う
分類によって大きな問題がある。
1920~1935年代頃 → 150種類以上の名称の犬が居た。
岩手県にもまいらうした犬が居た
引込犬になるとすねが長くなる。
退化によって骨の形が変わってくる → さあごが小さくなる。
犬の種類によって頭の形が変わってくる。
トホホオオカミ、犬の区別は見ただけでは分からない。
見分けるには骨の形を見たりすると良い。
耳がたれているのは、犬がつけられている時又は体調が悪い時?? ← 卵分...
犬の模様はオオカミに似ている。
足を見ると古い犬新しい犬に分かる。
犬はめたらと殺さないきまいがあつた。
1927年代は、キツネ?? オオカミ?? と思われる動物が居た。
犬にかなりの練習をさせて居た。
犬とオオカミの区別は → して
頭骨の变化する事によって、こうした犬は、人類史上で最も古くからの形質が保持されていると思われ、原種的な犬であることは確かである。と同時に、世界のイヌの歴史の中でも、極めて特殊な貴重な犬だということもわかってきた。
民俗学では、導犬説という考えもある。
条件が許せる村では、犬はたゞ野生動物との境界線を保ちたいと願っている。 ← らしいぞ。何

授業後の感想については、アンケート形式ではなく、作文形式で生徒らに書かせてみた。何点かおも

しろい回答が得られたので、ここに紹介してみたい。(以下、アンケート)

今日の講義を聞いて、昔から伊は犬に祀られてきたというのを知り、授業でわかったし、人といっしょに埋葬されていたのは驚きました。それに、縄文の犬と現在の犬の毛の色や骨格が違うことも知ることができました。昔から犬を訓練して狩猟できるようにしていることもわかりました。それに、今日このような授業を聞くことが出来て大変良かったです。

重カサとカサは好きなので楽しい内容もありました。でも骨の話は少し多すぎました。先生が好きな骨なども教えていただきましたが、私には骨の区別が分からず残念でした。でも人間が犬を観察して行動や心理を知るように、犬も人間を観察し、人間を見極めてしるのかと思うと少し怖いです。

今日の講義を聞いて、犬は人と同じで食べ物によって顔の形が変わる事や犬は木に登れる事が初めて分かった。それに犬は人の事をよく見ている事も分かった。あと人と犬と一緒に埋葬されていた事にびっくりした。

今日、五口未さの話を聞いて、犬の事だけでなく、人の事について学べたので良かった。まだまだ犬の事を知りたいと思った。生物について、これから学ばない。犬を繁殖しなげはならないと思う。

犬の歴史や人間と犬のかわり分かって良かったです。また、犬の今の印象がちょっと変わりました。いろいろ分かったので良かったです。

犬と人間との関係について、埋葬された骨の写真はリアルだったけどでもいろいろと新しく知ることが多くて勉強になった。古代の文化で犬がどんなに大事な存在だったか驚いた。我が家の犬をかわいがってあげようと思う。

終わりに

学校内あるいは教科書内だけの授業には限界があることは周知のことである。地域連携や外部講師派遣による授業のような形が薦められている現状ではあるが、とりわけ「イヌ」となると、あまりにも身近で、「専門教育」という視点から考えるとその対象にはなりにくい印象を与える。

また、「イヌ」の専門教育として教科書的なとらえ方をすれば、高校段階では「イヌの飼い方・しつけ方」「社会生活の中でのイヌの利用」の紹介といった程度が限界なのかもしれない。

生徒の感想の中にもあったが、「イヌを知ることにはヒトを知ること」にもつながるといった視点も一つである。

ヒト対イヌといった形ではなく、イヌを通して私たち人間生活を見直していくこともできるであろう。とりわけ、縄文時代から関わってきたイヌのことを学習することは、イヌの歴史そのものだけでなく、現在の私たち人間生活を見直すことにもそのままつながると考える。

そういったことを考えると、「縄文犬を学習する」といったことも、基礎教育の中味として、精選・吟味をしながら取り入れていきたいところである。生物教育の有効手段の一環として、「イヌ」の教材化を考えていくといったことも、これから求められていくのではないかと思う。

最後に、快く特別授業をお引き受け下さり、ご尽力いただいた五味事務局長に感謝いたします。

宮沢賢治全集 1 (筑摩書房1995. 5. 30刊—第13刷)

『春と修羅』第二集—東岩手火山 より

犬

なぜ吠えるのだ、二疋とも
 吠えてこつちへかけてくる
 (夜明けのひのきは心象のそら)
 頭を下げることは犬の常套(じゃうたう)だ
 尾をふることはこはくない
 それだのに
 なぜさう本気に吠えるのだ
 その薄明(はくめい)の二疋の犬
 一匹は灰色錫
 一匹は茶の草穂
 うしろへまはつてうなつてある
 わたくしの歩きかたは不正でない
 それたくしの歩かたは不正でない
 もひとは犬の中の狼のキメラがこはいのと
 犬は薄明に溶解する
 うなりのある尖端にはエレキもある
 ちやつもあるくになぜ吠えるのだ
 ちやんと顔を見せやれ
 ちやんと顔を見せやれ
 誰かと顔を
 犬が吠えたら
 帽子があなた
 おまけに下を
 吠え出したのだ

(一九二二・九・二七)